〈文化史学会第九回大会発表要旨〉

堕地獄と蘇生譚—『醍醐寺焔魔王堂絵銘』を読む

阿部美香

貞応二年（一二二三年）、後白河院の皇女宣陽門院の御願を受け、成賢によって醍醐寺に焔魔王堂が建立供養された。仏師は快慶と湛慶、御堂供養の導師は安居院聖覚が務め、当代一流の人々が関わっていたことが知られている。しかし、その資料は少なく、堂内に描かれた地獄絵の内容など、具体的なことが明らかでなかった。

『焔魔王堂絵銘』（国立歴史民俗博物館蔵田中穣氏旧蔵典籍古文書）は、中世における焔魔王堂の諸相を蘇らせる資料として注目される、新資料である。これにより、焔魔王堂内の地獄絵が、およそ四三話の堕地獄、蘇生譚から成る説話画によって構成されていることが明らかとなった。また、本尊焔魔王は、従来考えられていた忿怒形の焔魔王像ではなく、焔魔天曼荼羅に基づく密教の本尊であり、壁絵を伴い、醍醐寺独自の世界像を創りだしていた。御堂供養導師に安居院聖覚が関与していることからは、中世の豊かな唱導文芸の世界へと広がる回路も認められる。

醍醐寺焔魔王堂は、女院と成賢によって建立された当時、歴史的、宗教的にも画期的な御堂であったと考えられる。本資料は、醍醐寺焔魔王堂の壁絵復原に留まらず、背後にある中世の思想や文化を探る上で重要な意義をもつものであることを、翻刻テクストと復原図を作成して考察し発表した。

南関東における埴輪の受容

小泉玲子

資料を直接観察することの出来た多摩川流域から相模川流域にかけての古墳出土埴輪をもとに、埴輪の受容について検討し、埴輪生産と供給について考察した。

まず、該当地域の古墳を河川ごとに整理し、最近の発掘成果による編年の見直しを行った。その結果、四世紀代に埴輪が採用された古墳は、交通の拠点となる地域にあり、その背後に畿内の東方政策が想定された。五世紀代の野毛大塚古墳は、この地域で形象埴輪を伴う最古の例であるが、普通円筒埴輪に河内政権下の埴輪製作者の技法を用いた製品とそうではない製品の二相が存在する。形象埴輪の導入を考えても製作に畿内集団が関っていたことは明らかであり、同時に在地の製作集団も想定される資料である。副葬品にも武具・武器が顕著であることから、畿内政権と結びつきを持った首長の墓であると考える。五世紀末以降、人物埴輪を出土する古墳が多く見られるようになるが、その中には埼玉県北部や群馬県の埴輪生産遺跡の埴輪に類似する資料と在地的な資料の両者が存在する。

以上のことから、三段階の受容を想定した。第一段階は、拠点古墳への採用、第二段階は畿内工人と在地工人による埴輪製作、第三段階は、北関東の埴輪製作地からの供給が顕著で、在地での埴輪生産が実施されたとしても非常に単発的な操業をしていた段階である。